

人類の歴史は感染症との闘いの歴史であるといわれます。グローバル化の進展や地球環境問題などにより、さらなる未知の感染症が将来を脅かす可能性も指摘されていますが、その一方で、新型コロナウイルスによるパンデミックは大学を「知の拠点」として再認識させるとともに、未来社会のあり方をいち早く現代に引き寄せたともいえます。ポストコロナ時代の医療はどうなるのか。知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する。ことを理念とする東京医科歯科大学の田中雄二郎学長に、トータル・ヘルスケアのさらなる重要性、そして社会との協調について伺いました。

知のネットワークとしての大学の存在意義とは

コロナ収束後の社会はどうなっているのか、またどうあるべきか、といったポストコロナの社会のありようが議論されています。一方で、2022年7月現在、第7波が到来し、新規感染者数が急拡大しています。こうした長期間にわたるパンデミックは、人類の歴史にわたる多岐にありませんが、そういう社会環境の中で、私たちはどうやって生きていくのかということを考えなくてはなりません。

予防にウエイトを置いたトータル・ヘルスケアへ

では、医療人としてはどうあるべきか。医療人のすべてが新型コロナウイルスに関わっているわけではありませんが、コロナの感染者が増えているといっても、それ以外の病気を患っているの方がはるかに多いわけですから。そういう事実を前提として、さまざまな事態に備えていくことが必要です。すなわち、コロナも含めて「予防」という概念がますます重要になっていくのです。

東京医科歯科大学は「トータル・ヘルスケア」を標榜しています。トータル・ヘルスケアにはいろいろな意味があり、例えば全身を診るのもトータル・ヘルスケアですし、空間的な広

がりやで診るといふ考え方もあります。加えて、病気が起こる前からケアしていくということが重要です。病気が起こる前から病気が治るまで、あるいは治った後の後遺症のフォローアップを含めたすべての意味が、トータルという言葉にはあるのです。そして、これからは病気を防ぐ「予防」ということに、今以上にウエイトが置かれていくことでしょう。ちなみに、今の医学教育は原因・診断・治療というところにウエイトが置かれているので、医学教育の初期段階から予防医学にもっと注力していく必要があるといえます。

パンデミックと未来社会 医工連携がキーワードに

パンデミックは未来社会を現代社会に引き寄せた、という思いは今でも変わりません。例えば、SDGsは2030年を達成の目標年度に置けていますが、地球環境も含め、人類社会で今後5年、10年のレベルで解決



する課題がもっと早く解決するよう迫られている気がします。DX(デジタルトランスフォーメーション)やソサエティ5.0も、コロナによって現実のものとして身近なものとなりました。東京医科歯科大学では一橋大学、東京工業大学、東京外国語大学と「四大学連合ポストコロナ社会コンソーシアム」を立ちあげましたが、コロナ禍で起きている社会問題について、オンラインによる「大人のゼミ」を開催し、今年6月には「最近の国際情勢(ウクライナ侵攻を含む)」をテーマにキックオフシンポジウムが開催されました。また、東京外国語大学による、東京医科歯科大学の教養のためのフランス語講座も実現しました。これもコロナがもたらしたオンライン化の早期実現の一つと言えます。

こうした未来が近づいてきた中で、だからこそ「対面のほうがいい部分とは何だろう」ということが問い直されていると思います。人と人のコミュニケーションは、やはりリアルの方がいいということも当然ありますが、医療でいえば、介護実習や臨床実習など、オンラインではできないこともあります。今はそれを吟味する段階ではないでしょうか。

遠隔医療はこれからはますます増えていくと思います。現在では外来レベルですが、通信システムが現在の5G(第5世代)から6Gの時代になれば、遠隔手術も可能になると予測されます。そのためには、医学と工学の連携である「医工連携」が必須となります。医工連携は、次の時代の医学のキーワードになるでしょう。

東京医科歯科大学 学長 田中雄二郎先生

1980年、東京医科歯科大学附属病院第二内科。1982年、関東通信病院消化器内科医員。1986年、米国マウントサイナイ大学附属アルコール研究治療センターリサーチフェロー。2001年に東京医科歯科大学医学部附属病院総合診療部教授並びに部長に就任。その後、同大歯学部融合教育支援センター長、医学部附属病院長、理事、副学長などを歴任。2020年4月から同大学長。

チーム医療とポイント・オブ・ケア

チーム医療も大切です。ただ、従来のチーム医療は医師が中心でした。それに加え、患者さんがチームの中に入っていないという問題がありました。しかし、患者さんも入ったチームであるべきです。東京医科歯科大学ではチーム医療教育の充実に力を注いでおり、2020年からスタートとした「チーム医療導入」でも、すべての学科の学生が低学年のうちから患者さん中心の医療を学ぶワークショップを行っています。もう一つ重要なのは、これまでは「患者さんが病院に来ることが中心

でした。これからは「患者さんのほうに医療チームが行く」形も進んでいくと思います。その典型的な例が在宅医療ですが、「ポイント・オブ・ケア」という概念があります。例えば、最近ではコロナのPCRテストションが街角に出現しており、皆さんはそこへ行って検査を受けています。これもコロナが引き寄せた医療の近未来です。イギリスではオンライン診療の結果に基づき、薬局から宅配で薬が送られてくるシステムができています。病院にほとんど行かないという社会が来るわけですね。だからこそ、社会との協調、コラボレーションがますます重要になってくると言えるでしょう。

社会と協調し視野を深めて 医療へチャレンジしよう

そのために、学生はどのように学ぶべきか。入学した段階からさまざま

ポストコロナ時代の医療を

見据えて、知と癒しの匠が

トータル・ヘルスケアの実践で

社会とコラボレーションする

まな職種を目指す学生たちと交わることが重要になってきます。東京医科歯科大学では2023年度からカリキュラムを全面的に一新しますが、その中で重視しているのが、他の学科と一緒に学ぶ機会を増やすということです。社会との協調は学部の時代から準備していくことが大切です。これからの医療を目指す人には、どのような資質が求められているか、という点においても、協調性は非常に重要です。そのほかの資質としては、「多角的に、そして深く」物事を考えることができるということが挙げられます。それを磨くためには、議論の場をたくさん作る必要があります。東京医科歯科大学には6つの学科がありますが、それらの学生たちがが学科を越えて一緒に議論する場を作るとともに、本学にはない学部を持つ他大学や海外の大学と交流することで、視野を広げ、物事を深く考えられるようにする学習環境づくり

を目標としています。

さて、コロナがもたらした教訓の一つに「完璧を目指す」と後手に回る「ということがありません。医学の場合、失敗は許されないという側面があり、エビデンスがないことはできないのですが、それが行き過ぎると身動きが取れなくなってしまうからです。必要な時には大いにチャレンジする」という前向きな姿勢も必要です。結果として、それにより学問も進歩し、人類社会も成長するので

。「知と癒しの匠」という言葉には、知だけではないけれど、癒しだけでもだめである。サイエンスとアートの両面がないといけない、という思いが込められています。これから医療の世界を目指す若者の皆さん、さまざまな人と対話し、交流して視野を広げ、次代の医療に向かって大いにチャレンジしてみませんか。

